

F. モーリヤックにおける“母”の影

中 島 公 子

イエス羨望

エルネスト・ルナン (Ernest Renan 1823-1892) は『イエス伝 *Vie de Jésus*』(1863)において、イエス・キリストを「たぐいなき人」と呼んだためにコレージュ・ド・フランスを追われ、彼の著作は“禁書”の扱いを受けた。それから七十年以上を経て、二十世紀を代表するカトリック作家と称されるフランソワ・モーリヤックが書いたもう一つの「イエス伝」『イエスの生涯 *Vie de Jésus*』(1936)は、イエスを「人間の子のうちでも人間の子だった……一人の男」と呼んでも禁書とはされず、カトリック社会でも多くの読者を得た。時代がそれだけ動いていたということであろう。

しかしこの書物も、当時いわゆるカトリック正統派の陣営から、全面的支持を得られたわけではない。小説家の書くイエス像は、聖書の祖述とは異なる、作家その人の個性による変形を蒙る。そうでなくては芸術とは言い難いのであって、その変形に宗教家のイメージと抵触する部分がでてきたとしても、やむを得ないことと言わなければなるまい。

当時この作家に浴びせられた批判の一つに、イエスの母マリアに対する態度の冷淡さを指摘するものがあった。第二章の「博士にたちまじる子」という一節が対象とされていた。

十二歳のイエスが父母に連れられて行ったエルサレムで迷子になる。三日

間、息子を探し歩いたマリアが見つけたのは、神殿の中庭に座って、博士たちと聖書について論議を交わしている、大人のように思慮深い少年の姿である。息せき切って駆け寄ったマリアが「どうしてこんなことをしてくれたの？ お父さんもお母さんも、どんなに心配したか、知れないのよ」と言うのに向かって、イエスはほかの児童なら決してしないであろう、不可思議な返答をする。

「どうしてわたしを捜したのです？ わたしが自分の父の家にいるのは当然ではありませんか」

イエスが“神の子”である片鱗を示した瞬間とされるエピソードである。これをとらえて、モーリヤックは次のような解説をほどこした。

ルカはイエスが両親に仕えた、とは断言しているが、やさしくしていただとは付け加えていない。母に対するイエスのいかなる言葉も、福音書においては、十字架上のあの最後の言葉を除いて、この女性に対しての独立不羈をきびしく宣言していないものはないのである。まるで肉体を得るために女を役立てたかのようで、彼はその肉から外に出ていた¹⁾。

「神殿のイエス」のエピソード自体は聖書の記述を少しも変えていない。

また、福音書にイエスとマリアの交流の記述ははなはだ少なく、イエスにおける神の計画からマリアの関与が注意深く排除されていることは、モーリヤックの指摘する通りと言ってよいのである。よく言われる「カナの饗宴」においても、奇跡を求めるマリアの願いを、「わが時いまだ至らず」と、一度は退けるイエスが描かれている。

しかしながら、いったん歴史上に成立を見たキリスト教において、聖母信仰は時代ごとに重要性を増して行った。4世紀から5世紀にかけての「神の母」論争——キリストの人間的本姓の母であるマリアは、その神性における母でもあり得るとする論、およびその反対論——は、まさにキリスト教の教義的基礎を固める論争であった。のちにイスラム教の創始者ムハンマドから

「四位一体」と皮肉られるマリアの神格化はこの「神の母」を信仰の本流とすることに始まるのだが、それ以来、幼子イエスを抱くマリア像のイコンはどこにおいても教会の壁面を飾り、ルネッサンス以降のカトリック教会では初々しい処女の立像となって、信者を待ち受ける。西欧カトリシズムの歴史は、神と人間の間の仲介者である聖母への熱烈な崇敬とともに歩んできたのである。ついにマリアを生きたまま昇天させ、彼女が母胎にあったとき原罪を免れていた、とする「無原罪の宿り」を教義として定めるまでに……。

とりわけモーリヤックが生きた十九世紀の世紀末から二十世紀前半の時代は、唯物論に対抗する精神のよりどころとして、聖母信仰が高揚期を迎えた時代であった。フランス・ピレネー山麓のルールドにおいて「無原罪の宿り」を名乗る処女の出現とともに葉驗あらたかな清水の泉が湧き出したのが1858年、ポルトガルのファティマで三人の牧童が同じような出現を見たのは1917年である。ノートル・ダム大聖堂で一瞬の啓示による改心を体験した詩人ポール・クロードル (Paul Claudel 1868-1955) の劇作『マリアへのお告げ *Annonce faite à Marie*』の上演が熱狂的な観衆を獲得するのは1912年のことであった。

このような時代にあって、カトリックでありながら、イエスがマリアに「やさしくなかった」、マリアとは彼にとってただ「胎を借りただけの存在であった」と言わんばかりのモーリヤックの解釈は異色のものと言わなければならない。修道会経営の私立学園育ち、かつての“香部屋の天使”フランソワのこの態度は、物議をかもすだけのことはあるのである。ある女流作家の自伝的評論“*Mauriac et la jeune fille*”²⁾は、当時こうした記述に不快感を示した一般読者の反応を生々しく伝えている。

だが、いま私はこのカトリック作家の信仰の正統性を問題にしているのではない。そんなことよりも、ここで注目したいのは、母親から精神を完全に独立させていた十二歳の少年イエスに対する、モーリヤックの讃美と羨望についてである。

〈母からの自立〉ということ、この作家は誰にでも可能な、あたりまえのこととは考えていないのである。

「彼はその肉から外に出ていた」。モーリヤックの小説作品をいくつか読んだ者には、この言葉にある種の感慨がこめられていることを感じとらないではいられないであろう。

人はすべて〈母〉から生まれる。〈子〉は出生の瞬間、母の肉体から分離する。しかし、独立するのはずっとあとのことである。多くの人が言うように、他の動物たちと比較して人間は未熟児で生まれるのであり、母の乳房に自分で這いよることもできない、無力な存在である。

そして人間が外界と自己を区別して認識するのも、先ずは〈母〉が他者であることの認識を通じてである。しかも、独力でその認識に到達するわけではない。〈母〉が〈子〉にこうあれと望むそのあり方に自己を即応させながら、人は外界との接し方を学習していく。〈子〉が世界に到達するのも〈母〉を通じてなのである。

こうして、〈母〉が他者であることに気づいたのちも、長らく人間は、その身のうちに〈母〉をのみこんでいる。これは逆に〈母〉が〈子〉をのみこんでいると言い換えることもできる。

このとき、どれほど物理的な距離があろうと、母と子は精神的に未分化であり、一体である。子は母の「肉から外に出て」いないのである。

この一体化はいつまで続くか、分離はいつどのようにして完了するか。目に見えない心の領域のことであるから、それを明確にするのは難しい。いつ自分が母から独立した人格となったか、どのようにして個である〈自我〉を獲得したか、それを自覚している者はおそらく少ないだろう。それほど自然に、人はいつの間にか〈母〉を離れて自立するものだ、とも言えるであろう。だが、すべての人がそうであるとは限らない。なかなか〈母〉から離れられない脆弱な自我を、いつまでも抱えて悩む人も少なからずいるのである。

『イエスの生涯』の中でモーリヤックは、十二歳にして、いや生まれたそ

の瞬間からして〈母〉の支配を脱していたイエスに羨望と感嘆の眼差しを向けている。ということは、彼自身にとって、〈母〉からの自立とはそれほど自然でも容易でもなかった、ということの意味する。母の肉の外に出られない者の不幸を、この作家は知っているのである。

発表したものとしては最後の作品となった『ありし日の少年 *Un adolescent d'autrefois*』(1969)のなかで、84歳の老作家は、ほとんど彼の全作品に影をおとしていた〈母と子〉のテーマを、主人公の少年の口から、次のように言わせている。

ママはその場にはいなかったが、それでもぼくはママに呪縛されてしまっていた³⁾。

少年の母親は、〈母〉の側から次のように言う。

わたしはあなたを、おなかのなかに抱えていたのよ。だから死ぬまであなたを抱えていかなくちゃならないのよ⁴⁾。

〈母の呪縛〉を知り、自らそれに悩み、これと格闘する少年たちのドラマを追いつけたモーリヤックなればこそ、マリアとの物理的な距離をそのまま精神的な距離となし得た十二歳のイエスに、強い羨望の眼差しを向けたのだとすることができる。

「彼はその肉から外に出ていた」——この言葉にはモーリヤック自身の深い嘆息がこめられているのである。

恐るべき母たち

〈子〉の不幸を作り出したのは〈母〉である。

子供を全面的に所有したいという気持、子供の心、その欲望、欲び、悲しみのすべてを掌中に握っておきたいという、なにやら専制君主じみた強大な支配欲、これを自らは天地神明に誓って恥じるところのない〈愛〉と信じて、〈子〉に押し付ける「恐るべき母たち」は、『ジェニトリクス *Genitrix*』(1923)のフェリシテ・カズナーヴ Félicité Cazenave によってモーリヤック世界に初登場する。

レ・ランド地方の旧家であるカズナーヴ家の嫡男フェルナン Fernand は五十歳近くになるまで独身で、母親のフェリシテの独占的な愛情によって生きてきた。その絶対的支配に対する反抗心からようやくマチルド Mathilde という妻を得たのに、母に去勢されたこの男は、新婚旅行の旅先から早くもこんな手紙を母に書き送るのだった。

「……ママは正しかった。母親だけがぼくのような人間を理解できるのです。ほかの女はすべて他人でしかありません。夫を愛しているつもりでいるが、実際は自分しか愛しじゃないんです。(……) ぼくらがいまいるバイヨンヌの駅に近いホテル、ママ、おぼえているでしょう？ そんなに豪奢ではないけどふたりとも結構満足していましたよね。マチルドはここにるのが厭だというんです。潰れた南京虫を一匹見つけたのと、バケツが臭うからって。(……) あいつはたえずぼくらの家族のあらゆる習慣を嘲ったり批評したりしています——面倒臭がって、晩に風呂にはいらないのは不潔だって。明日の朝になったらまた体中洗い直さなくちゃならないって。ぼくは我慢していることのほんの些細な部分しか、ここに打ち明けられませんが、でもご心配なく、お母さん、あなたの息子は最後まで義務はまっとうしますから……」⁹⁾

作者によって雌狼にたとえられる母親を狂喜させる〈不一致〉の兆しを積み重ねながらも、家門のために「義務はまっとうする」息子によって、招か

れざる嫁は妊娠し、それを機会にフェルナンは独身時代の寝室に戻る。母と子がカーテンの陰で囁き声を交わすのを聞きながら、マチルドは流産のあと心臓が衰弱して、誰にも看取られずに「愛されなかった者の静かな死」を迎える。

小説は、この「マチルドの死」を冒頭に据えて、ここから展開し始める。二人の女性——嫁と姑、否むしろ二人の母と言ったほうが適切かもしれない——がフェルナンに及ぼす支配力の熾烈な戦いは、一方が死んだからといって終わるものではない。緒戦はフェリシテに軍配があがったが、死んだマチルドと生きているフェリシテの間に第二ラウンドが始まる。ふしぎなことに、生者と死者とのあいだで、勝利は死者の側にあるのが、この試合の特色である。妻の死骸を前にして「盲目だった……盲目だった……」と呟くフェルナンは、マチルドが消滅するのを易々と受け入れる気持になれない。「死者は次第にフェルナンの心の中にうずくまって、まるで要塞のように彼を占領していく」。フェルナンは、妻が孤独のうちにあの世に旅立った寝室に彼のベッドを移し、そこに身を横たえる。妻が生きていたときにはあまり抱くことのなかった欲望を、こうして身内に呼びさますためである。

彼女（マチルド）は部屋の中ではなく、彼の肉体、結婚当時の夜のことでものを思い出している彼のはりつめた肉体に入り混じって生きていた⁹⁾。

こうして第二ラウンドは死んだマチルドの圧勝。生けるフェリシテはなすところなく完敗を喫する。

だがそのうち、やがてフェリシテ自身も死を迎えるときがきた。「嫁は姑に対して死んでいるという勝ち目を失」ったのである。

さて普通なら、ようやくふたりの女性からの呪縛から解放されたのだから、息子はここで自分自身を見出して新しい生を歩き始めてもよいように思われる。しかし、この男はそうはならなかった。かえって生活の張りを失い、た

だ怒りっぽい老人として空虚な日々を送りながら自分自身の死へと近づいて行くほか、することがなかった。

フェルナン・カズナーヴは、黄色味がかったまがいの板壁が気に喰わないと、いつもぶつぶつ言いながら、寒い食堂にいたが、そこにもはや一人ぼっちではないということを、他の者は知らなかった。彼が皿から眼をあげると、半世紀のあいだ王座を占めていた場所に、堂々として支配的な、死んでますます威厳を加えた母親が現れ、その怒りを含んだ神々しい顔で、気弱な息子を責めているのだった⁷⁾。

小説の結びは、彼が、方言しか話せない農婦出身の下婢マリ・ド・ラド Marie de Lado の胸に頭を寄せるところで終わる。乳母でもあったこの女性に作者は「黒聖母」の称号を比喩として贈っている。母なしでは生きていけない“永遠の息子”の、目を蔽いたくなる老残の姿である。

『ジェニトリクス』のフェリシテとマチルドが死なずに齢を重ね、流産を免れた子供が小学生にまで成長した家庭の物語が『臭い子 *Le Sagouin*』(1951)である。一時劇作や映画シナリオに関心を移していた作家の晩年における小説復帰を飾るこの作品は、モーリヤック全作品中もっとも暗く絶望的な物語として知られている。それは冒頭母親のポール Paule から横っ面を張り倒されて吹っ飛ぶ姿で読者の前に現れる、誰からも愛されることのない不幸の塊ギョーム Guillaume 少年と、結末にいたって川に落ちて流されて行くこの少年を追って、それを救うこともできず、ともに流されて帰って来なかったその無力な父親、おちぶれた男爵家の当主ガレアス・ド・セルネス Galéas de Cernès、この二人の人物の救いのない姿が、他の作品に類を見ないほど強烈な印象を残すからである。このような荒涼たる風景を惹き起こす原因は生きている亡骸ガレアス男爵の内面にあるのだが、その内面とは、母親と妻によって引き裂かれる“永遠の息子”フェルナン・カズナーヴその

人の内面に通じ、これをより深化せしめたものなのである。

ボールが男爵夫人の地位に固執する強いマチルドなら、嫁にその名称を譲ることは当分有り得ない“マミー（祖母）”こと老いたるセルネス男爵夫人はその地位ゆえにさらに強大な覇権を握るフェリシテである。方言しか喋れなかったマリー・ド・ラドに代って、台所でギョーム少年に鍋にこびりついた残り滓をなめさせてくれるかつてのガレアスの乳母は、オーストリア人なので“フロイライン”と呼ばれている。こういう風にちょっと家庭環境の階級が上昇している（？）ことを除けば、カズナーヴ家とセルネス家とはまさに相似形をなしている。物語はギョームを中心に展開するからその点『ジェニトリクス』とは趣が異なるが、この少年の不幸の源がママとマミーの確執と、その間にあってすでに絶望している父の無力さにあることは、誰の目にも明らかであろう。マチルドの子供は生まれて来なくて幸せであった……そう思わせるほどに、ようやく十二歳（年齢に注目）までたどり着いたギョーム少年を取り巻く〈家庭〉という名の闇は深い。

「恐るべき母たちとその子供たち」の関係が描かれているモーリヤックの作品はこの二つだけではない。これまでも多くの研究家が好んでこのテーマを取り上げてきたのは、それがほぼ彼の全作品を覆っているからである。Malcolm Scott の『モーリヤックとジイド——自我の追求 *Mauriac et Gide—La recherche du Moi*』（2004）⁸⁾ は次のように述べている。

常套的であるか否かはさておき、敬われ、慕われ、おそらくはひそかに欲望の対象となって強い支配力を息子の上に及ぼしている母親の役割は、ジイドにおいてもモーリヤックにおいても、彼ら自身の生におけると同様作品の中においても決定的なものである。その支配力はあまりにも強く、息子は母の影から抜け出して他の女性を見出すことが到底できないのである⁹⁾。

そして、この両作家に共通してホモセクシュアルな傾向が看取れることについて、これはまさに母親の支配から脱し得ない息子が、欲望の対象を女性に求めることができない、つまりは“母”によって去勢されていることに原因があると述べている。「欲望の応答を、すでに所有しているもの——すなわち彼自身の性からしか得られない、感情の拠り所をそこにしか求められないことの現われである」と。そして男色傾向と母親の支配を結びつける見方は彼だけではないとして、Mutterfixierung（母親固着とでも訳すべきか）なる造語をもってこれを説明するドイツ語論文の著者 Dorothee Risse および英語の James MacNab の名をあげている。現在のところ稿者はこの二つの論文の内容を知ることができないので、これ以上男色と母親の関係についての言及は差し控えることとする。

フランス語で書かれた“母”についての論文には、2002年刊行の Nouveaux Cahiers François Mauriac 叢書 No 10 に、John E. Flower の《母親病 *Le Mal de mère*》なる論考がある。このなかで Flower は、まずモーリヤックの初期の作品には、“母”が出てこないこと、しかしそれは設定の上で主人公が母親と死別しているからであることに注意をうながしたあとで、『ジェニトリクス』以降の恐るべき母たちが〈寡婦〉であることの重要性に着目している。

たしかに、そこに論じられている四作品：①『悪 *Le Mal*』（1924）②『失われたもの *Ce qui était perdu*』（1930）③『フロントナック異聞 *Le Mystère Frontenac*』（1933）④『ありし日の少年 *Un adolescent d'autrefois*』（1964）の母親たち：①テレーズ・デゼムリー Thérèse Dézaymeries ②マダム・ド・ブレノージュ Madame de Blénauge ③ブランシュ・フロントナック Blanche Frontenac ④マダム・カジャック Madame Cajac らはすべて〈寡婦〉である。私見ではこれに少なくとも⑤『海への道 *Les Chemins de la Mer*』（1939）のレオニー・コスタド Léonie Costadot と⑥『パリサイ女 *La Pharisienne*』（1941）のブリジット・ピアン Brigitte Pian は加えるべきだ

と思う。

〈寡婦〉たちはモーリヤック作品中ひとときわ生彩を放つ人間典型である。

〈寡婦〉という設定は、これらの母たちが、夫を失ったことによる満たされない欲求を息子によって満たそうとしていること、しかも、自分ではその支配欲に、わが子に欠けている〈父性〉を重ね合わせて、正当化をはかっていることを示す。満たされない欲求による“母”の呪縛は必然的に〈子〉の異性に対する性的不能を導き、〈父性〉によって強化された支配力は〈子〉の社会的自我の確立を妨げる。母子家庭は「恐るべき母と子」を生みやすい土壌なのだ。

もっとも、これらの人々がすべてフェリシテ・カズナーヴのようないかにもおぞましい「恐るべき母」の外容を呈しているわけではない。“母”の呪縛はそれが無意識のうちに行われるところに最大の特徴があるのであり、世間的に見ればたかだか「しっかり者の後家」に過ぎない、才色ともに人並みすぐれた、良き母親たちというのが彼女らの共通した性格と言える。とくに、若かった頃、彼女らがどんなに美しかったか、また〈子〉から見てその母がどんなに慕わしい存在であったか、作者はしっかりと描きこんでいる。

そこに示唆されるのはむしろ母と子の近親相姦的關係である。愛し合わなければ憎悪も破局も、脱出への願望も生まれない。この濃密な母と子の間に流れているのは、明らかに〈愛〉なのである。「正当な愛情」とされるものに隠れる〈罪〉を抉り出すモーリヤックの小説家としての目が、「恐るべき母たちとその子供たち」を生み出したのだと言うべきであろう。

さて、このような母子関係を作者はどこから学んだのか。問うまでもなく、それはモーリヤック自身の内部からである。生い立ちがすべてを証明する。したがって、次にはフランソワ・モーリヤックの実母がどんな人物だったのかを見なければならぬ。

クレール・モーリヤック¹⁰⁾

モーリヤック家に嫁して、のちの小説家フランソワを生むクレール・マルグリット・コワファール Claire Margueritte Coiffard は、1850 年頃、ボルドーの富裕な生地商人レイモン・コワファール Raymond Coiffard と、砂糖の輸入・精製・販売（輸出）を営む豪商アブリバ家から嫁いだイルマ Irma Abribat との間に生まれた。コワファール家はレイモン一代で叩き上げたものだが、アブリバ家は中世以来の旧家であり、その経営する砂糖の精練と輸出は十七世紀にはじまるボルドー市の中心産業であった。イルマの生まれ育った十九世紀はアブリバ家がボルドーのグランド・ブルジョワジーに名を連ねた時代であり、イルマは生涯アブリバ家の誇りを持ち続けた。そのイルマによって強力な姻戚を得たレイモンの呉服店は繁盛して、アブリバ家の婿に相応しい富を築いた。この家に生まれたクレールは人も羨む深窓の令嬢として、父母とりわけ母のイルマの影響を強く受けて成人したのである。

クレール嬢は美しかった。残された写真でも十分にそれはうかがえる。ピアノの名手で、メゾソプラノの声も美しく、女学校でもしばしば独唱者にえらばれ、「タンホイザー」のエリザベートの祈りが十八番だったという。

しかし何よりも特徴的なのは、母親のイルマ譲りの固いカトリックの信仰であった。イルマはボルドーの司祭たちが、自分の教区で起きるトラブルの相談や仲裁を頼みに来るほどの存在であり、この市の慈善事業やカトリック系の病院、学校でイルマの援助を受けていないものはない、と言われていた。レイモンが彼女のために建てたボルドー近郊のグラディニヤン（現在ボルドー大学の敷地となっている）の壮麗な館には、専用の聖堂が設けられ、司祭が出張してミサを立てることが許されていた。

クレールはこの館で天使にかしずかれるような生い立ちをし、修道院経営の女学校で修道女とともに成人したのち、社交界に出て行ったのである。

彼女が結婚した相手ジャン・ポール・モーリヤック Jean-Paul Mauriac は、1850 年、酒樽製造業を営むジャック・モーリヤック Jacques Mauriac とマチルド・ラペイル Mathilde Lapeyre の長男として生まれた。クレールより 6 歳年上。1870 年代の結婚当時は、父の家業である酒樽製造会社の若き経営者であった。しかし、モーリヤック家を紹介する場合、ジャックの父ジャンによって興されたジロンド県の大地主、とするほうが、より正確かもしれない。ジャンは十八世紀末に、ボルドーの南四十キロ帯に広がるレ・ランドと呼ばれる湿潤な地方の貧しい農民の子に生まれた。樽作りから樽屋となってボルドー市で酒樽の製造・輸出を手がけて財をなしたが、その生涯の目的は商売よりも土地にあった。汗水ながして働いたのはその金で土地を買い「地主になる」ためだった、とのちにその曾孫フランソワは分析している。

クレールがモーリヤック家に嫁いで来たとき、舅ジャックはレ・ランドに 3000 ヘクタールに及ぶ松林をはじめとする所有地を持っていた。これは彼が結婚の際、新妻マチルドによって嫁資としてもたらされたものであった。他方ガロンヌ川の東側には三つの酒蔵、ブドウ畑、果樹園や栗林を含む 18 ヘクタールの農地があって収益をあげていた。ジャックは息子のジャン・ポールに酒樽会社をまかせて、それぞれ方面を異にするこれらの膨大な所有地と、これを耕作する小作人の管理に勤しんでいた。骨の随まで農民であったジャンの血はジャックにしっかりと受け継がれていたのである。

だが、三代目のボルドー生まれ、ボルドー育ちのジャン・ポールは、教育も受け、若くしてすでに社交界のマナーも身につけたスマートな都会人であったから、コワファール家もアブリバ家も、この青年が共和主義者でドレフュス派で、幾分反教権的なところがあったにしても、彼を姻戚に加えることに何の異存もなかった。むしろ十九世紀末、病虫害から葡萄酒業界にかけりが生じ、ボルドーが経済的危機に見舞われたとき、ランドの松材がもたらした好景気はその危機を救ったのであったから、広大な松林の所有者であるモー

リヤック家はむしろ優位に立つような立場でこの結婚に臨んだのであった。

ジャン・ポールは新婚早々普仏戦争に従軍し、帰ってからボルドーの港に近い旧市街バ・サン・ジョルジュ通りに居を構えた。新婚夫婦は次々と子宝に恵まれ、ジェルメーヌ Marie-Josèphe Germaine (女子)、レイモン Marie-Joseph Symphorien Raymond, ジャン Jean, ピエール Léonard Pierre, そしてフランソワ Charles-François が生まれた。

幸福の絶頂と言ってもよいところへ、不幸は突然訪れた。

1887年6月の暑い日、ジャン・ポールはランドの見回りに行き帰宅後頭痛を訴えた。そして三日病んだあとあっけなく世を去った。享年三十七。クレールは三十を過ぎたばかりで、五人の子供を抱える〈寡婦〉となってしまったのである。末っ子フランソワ生後一年八ヶ月のときだった。

親戚たちがこぞってこの不幸に見舞われた若い未亡人を助けた。ジャン・ポールが亡くなる前の年、夫レイモンに死なれて、娘より一足先に〈寡婦〉となっていたクレールの母親イルマ・コワファールは、ボルドー目抜き場所であるデュフラン・デュベルジェ通りの邸宅に娘とその子供たちを引き取った。モーリヤック家の所領地の管理はランゴンに住むジャック夫妻が行なった。ジャン・ポールの弟で兄の行かなかった法科大学に進み、判事の職についているルイが暇を見てこれを手伝った。

長女ジェルメーヌ (のちに医師に嫁ぐ)、長男レイモン (1917、二十歳で病没)、次男ジャン (司祭となる)、三男ピエール (のちにボルドー大学医学部長)、そしてのちの作家末っ子のフランソワ、これら五人の子供たちは、デュフラン・デュベルジェ通りの四階で、喪服がさらに美しさをきわだたせる母を取り囲んで、緊密な聖家族を形作ったのである。

毎晩夕食がすむと、子供たちはクレールの寝室に集まる。陶磁のランプに明かりが灯り、クレールは寝台の脇の祈祷台に跪く。その裳裾に縋るように子供たちも跪く。クレールの先導で夕べの祈りを唱えるためだ。

「み前にひれ伏して、おお、わが神よ！ 御身を知り、御身を愛すること能ふ心をば、われに授け給ひしを謝し奉る」

終わりに近く、「今宵死のわれを襲はざるや否やを知らぬ不安のうちにありて……」というところがある。フランソワは、その文句を切迫した息遣いととも「今宵、ああ、死のわれを襲はざらむことを！」と、勝手に読みかえていた。回想録『ある生のはじまり *Commencements d'une Vie*』（1932）の語るところによれば、である。

死の影のもと、不安におびえながら成長していく子供たちの、母は隠れ家であり楽園であった。父だけではなく「死」は次々とこの聖家族の周辺を襲ったからである。ジャン・ポールの死の翌年、彼の母であり子供たちにとっては父方の祖母マチルドが世を去る。そして三年後に、残された夫のジャックが路上で狭心症の発作に襲われて身罷った。このとき無神論で通してきたこのクレールの舅は、聖体降福式に行く女性を送って教会に足を踏み入れ、その帰途発作を起こして自宅に運ばれてから、件の女性にすすめられて祈り、「信仰がわれわれを救う」という言葉を残して息を引き取ったという。この「奇跡的な回心」の話はのちのちまでも繰り返し子供たちに語り聞かせられた。前にも触れたように、どうやら回心する暇もなくあの世へ行ってしまった子供たちの父親ジャン・ポールは共和主義者でドレフュス派で反教権主義者だったので、格別たくさんのお祈りを必要としていたはずだからである。少なくとも彼ら一家の保護者として祖父母のうちひとり生き残ったイルマ・コワファールは、このことを強く子供たちに印象づけるよう娘に求めたに違いない。

このイルマが、クレールに劣らず「恐るべき母たち」の創造に果した役割は軽視し難い。別の回想録『内面の記録 *Mémoires intérieurs*』（1951）『続内面の記録 *Nouveaux Mémoires intérieurs*』（1965）には次のような証言があるからだ。

「私が『ジェントリクス』の作者なのは偶然ではない。子供の頃、私の周囲では女が君臨していた。」「私の周囲には二種類の女しかいなかった。“支配する女”と“仕える女”……」¹¹⁾

そして“支配する女”すなわち女帝の典型がイルマだったのである。たしかに、のちにどれほど偶像が毀たれようと、まだクレールの老残の姿はフランソワの目には映っていない。「死してますます」威厳を加えて王座に君臨するフェリシテ・カズナーヴは、商都ボルドーのブルジョワ家庭の価値感とカトリックの権威を一身に体現した“醜いお祖母様”の堂々たるイメージから作られている。イルマは1907年、フランソワが大学生の時に世を去ったが、その臨終の床に隣りあう部屋でコワファール家の親戚が遺産争いに没頭するのを目撃して、「小説家としての目を開かれた」と回想録には記されている。

子供時代にもどろう。クレールとイルマによって作られていた“繭”のなかで、子供たちは成長して行った。母親の偶像が堕ちるときが来るなどとは思ひもなかった。とりわけ「ママの秘蔵っ子」であった末っ子フランソワは、ひよわで学校生活に適応できないまま年齢を重ねていったから、その分、隠れ場であり、庇護者である母には忠実だったに違いない。だが忠実であればあるだけに、束縛は感じていたであろう。冬ともなれば午後三時には日が翳りはじめる陰鬱な石の都ボルドー、天を突く尖塔に囲まれた大伽藍、その影に隠れるような邸宅の窓からは遊び盛りの少年を楽しませるようなものは何も見えない。隠れ場もよいが、育ち盛りの少年には解放の場も必要だった。

のちの作家となる想像力豊かな少年がそのとき求めたのは、面白いことに死んだ父親による「解放」だった。回想録にも小説作品にも出てくる印象深い光景がある。学校帰りの少年が、我が家めざして走っている光景である。死んだと言われている父親がじつは生きていて、遠い旅から家に帰りついたところだ、という思いに取りつかれて、彼は全速力でボルドーの街路を駆け

抜けているのだった。学校が休みになると行くランゴンの祖父母の残した家には、「共和国兵士ジャン・ポール・モーリヤック」と誇らしげに書き込んだ壁の落書き、従軍記念のカスケット帽や父が愛用した乗馬鞭などがあって、男の子の夢を刺激した。父が無神論者で回心のいとまもなくさっと異界に飛びだったことは、母のいう天国や煉獄とはちがう、もっと明るいあの世があることを少年に示唆していた。

家だけではない。モーリヤック家の所領地である葡萄畑や松林、レ・ランドをへめぐるって流れる清冽なユール川の流れといった大自然も、少年に「解放」をもたらした。そこで彼は日がな一日野山を駆け巡り、自分ひとりの信仰の対象である「榎の木」に供え物をしたりして、〈汎神論的〉な陶醉に耽った。そこにはクレールの知らないフランソワが育ちつつあったのである。

母 — ボルドー — 冬 — キリスト教的束縛

父 — 田舎 — 夏 — 異教的解放

という葛藤の図式が幼いフランソワのなかに生まれ、自我構造の基底を形作って行ったことを、回顧録やエッセイの多くが証言している。

しかしながら、渴仰の的であったクレールが「恐るべき母たち」のひとりに変身したことについては、クレール自身にも責任なしとは言えない。

クレールは〈寡婦〉になることによって変貌したのである。いや変貌、というのは正確ではない。はじめから持っていた性格が強化されて行ったものと言うべきであろう。舅姑を失い、頼みの母親は老いて行く一方、とすればモーリヤック家の行く末と五人の子供たちの成長は一切クレールの肩にかかることとなる。たしかに法律家のルイという力になる義弟の存在はあった。が、彼とても職をなげうってまで姪甥たちのために尽くすわけにはいかない。クレールは次第に所領地の管理や経理に携わるようになった。そして、この深窓育ちの令嬢だった若後家が、意外にも経営の才に恵まれていることに周

困は目を見張ったのである。ルイだけでは手の廻りきれないランゴンとマラガールの葡萄畑、サン・サンフォリヤンの松林の管理は、いつの間にかクレールの手に握られ、この若後家は生産物の買い取り業者、加工業者との交渉にもくちばしをはさむようになって行った。

彼女なしでは何も動かない事態が生まれていた。前にも指摘した松材の需要の増大という時代背景のせいもあった。気がつくとクレール・モーリヤックは押しも押されもしないモーリヤック商会の女経営者となっていたのである。

考えて見れば無理からぬことではある。商都の誇りである大商人たちの娘であり孫娘だったのだから。しかし、いわゆる男まさりの女実業家になったというのではない。あくまで夫とその祖先たちが残してくれたものを、命を賭けて守り抜く〈寡婦〉なのである。資産が土地という動かないものであることが彼女に適していたとは言えるかもしれない。ともあれクレールは着実にモーリヤック家の資産を伸ばし、母の家の居候から独立する際にはマルゴエ通り（これもボルドーの目抜き場所である）にあった古いホテルの一部を買い取って移り住んでいた。のちに作家となってからフランソワは『蝮のからみあい *Le Nœud de Vipères*』（1932）のなかに、引っ越してみたらボーイが玄関をあけて出迎えたのにびっくりした思い出を活かしている。いつの間にかこの母子家庭は大金持ちになっていたのである。

このようなクレールの生き方を支えたものは、カトリックの信仰と先祖譲りのブルジョワ的道德観である。すべてを神の恩寵と見做し、ひたすら家族の上に恩寵を呼び求めるために、身を慎み、隣人とりわけ家に繋がるすべての人々を愛して、祈りと信心業に励む。社会生活において大切なのは、〈寡婦〉であることによって侮られたり、子供たちに不利益がもたらされたりするのを避けることである。そのために、生活は質素に、しかし馬鹿にされてはならないから、世間並みの見栄は張ることを躊躇わない。何より大切なのはご先祖が汗水たらして大きくした財産を決して減らさないこと。しか

しそのためには「土」に信頼を寄せるのがもっとも近道だということを、クレールは婚家であるモーリヤック家の死せる農民貴族たちから学んでいた。

とりわけずば抜けた才能があったわけではなく、〈寡婦〉なればこそ、モーリヤック家の〈嫁〉は農民とブルジョワジーの合体による合併企業を成功させることができたのである。

信仰も道徳も、一つの目的に向かっていった。目的、それは子供たちである。子供のためなら、母親は何もかも捧げることができる。「家」というものがすべてに優先したイルマとクレールの違いはそこだった。クレールは女帝ではなく、単なる「母親」として子供の深層に君臨したのである。

子供の側からすれば、むしろやりきれなさはそこに生じたとも言えるであろう。「何もかもあなたのため」と言われるほどの重圧はない。そしてブルジョワ的道徳観と信仰とが手を組んで彼女の行動を正当化することに使われるとき、そしてその論理のすり替えの欺瞞性に彼女がまったく気づかないとき、正義感に目覚めた感じやすい年頃の少年たちが母の偶像の失墜を自覚するのは自然なことである。

モーリヤック作品中もっとも自伝的要素が強いと言われる『フロントナック異聞』には、クレールをモデルとしたブランシュ Blanche とルイ叔父をモデルとしたグザヴィエ Xavier 叔父が口論するのを、フランソワの分身であるイヴ・フロントナック Ive Frontenac が立ち聞きするところが出てくる。これをモーリヤック一家に戻して、クレールとルイの間にあった実際の口論として以下に再現してみよう¹²⁾。

問題はジャックの妹すなわちジャン・ポールやルイの叔母にあたるフェリシア Félicia（実在）という知能に障害のある老婆の処遇についてであった。障害の原因は生まれたときに鉗子で頭を引っぱり出されたため、と言われていたが実際のところは誰も知らない。とにかくモーリヤック家で誰よりも長寿をまっとうしたこの知恵遅れの老嬢を、ルイはジャック亡き後のランゴン

の館に、侍女と料理女と馬車の御者、それに掃除婦を常駐させて、住まわせていた。クレールはそれを無駄な冗費と見做し、フェリシアを養護施設に入れるよう、ルイに進言したのである。ルイはこれに次のように答えた。

「モーリヤック家では、家族のために使う金が問題になったことは一度もないのです。ランゴンの家の経費を義姉さんが持つのをいやだとおっしゃるなら、わたしが全額持ちましょう。それにあなたはお忘れになっている。フェリシア叔母さんには、祖父のジャンからの遺産をもらう権利があったのに、父が遺産分割のときにそれをうっかり忘れて……」

と言いかけたルイをびしりと押さえて、

「わたしはたしかにモーリヤック家の人間ではありませんけれど」とクレールが言った。「でもね、わたしの子供たちはいずれ大叔母さまの生活費を分担することになりますわよ、ね。当の大叔母さまはそれをお楽しみになることもできず、ただ高くつくだけのあの暮らしを保証するのはうちの息子たちってことになるんですよ。いいですとも、賛成するわ、だってそれがルイ、あなたのお好みなんだから。ただ、何としてもわたしが許せないのは」と、クレール一段と声を張り上げ、「子供たちがその趣味の犠牲になることなの。あなたのせいで、子供たちの幸せが危険にさらされるっていうことなのよ」

ルイが義姉の真意を掴みかねて、返答にとまどっているところへ嵩にかかって、クレールは続けた。

「ルイ、あなた、あの痴呆の方が世間でいろいろ取り沙汰されていることを、なんともお思いにならないの？ 精神病だと思っている人もいますわ。それも遺伝性の……。ルイ、ご自分の責任を直視する勇気を持っていただきたいわ。老化が加われば、ますます叔母さまのお世話はたいへんになるでしょう。それでも、そうした一切のことは、あなたのお兄さまの息子たちによって賄われなくてはならなくなり、そのあげく、いざ結婚というとき、子供たちはどこのお宅からも門前払いという憂き目を見ることになるのよ」

「そういうことは、これまで考えもしませんでした」

さっきとは打って変わったルイの力ない声が聞こえた。「わたしは子供のことはちっとも考えていなかった」

そのとき、部屋の外の階段に腰掛けていた小さなフランソワは、叔父の弱々しい声を持つ哀しみの色を記憶にとどめずにはいられなかった。そして「おのれのごとく隣人を愛すべき」信仰の徒である母親が、自分の言っていることの残酷さにまったく気づいていないことにショックを受けた。「ママがぼくたちのことを思うのと、ルイ叔父さんがフェリシテ大叔母さんを思うのとは同じ愛情なんだってことが、どうしてママにはわからないんだ」

おそらくそれはママが有能な経営者だからだろう……と、フランソワは思った。おそらくパパが生きていたとしても、ママには敵わなかったろう。パパは優しく、弱くて、きっとルイ叔父さんよりもっと傷つきやすい人だったに違いないから……。

『癩者への接吻 *Le Baiser au lépreux*』(1922) という作品はみすばらしい容貌の青年ジャンが咲きこぼれる大輪のマグノリアにも似たノエミを妻として、自己嫌悪に身をすり減らして命つきの物語であるが、じつはこの小説には発表されない“最終章”¹³⁾ があって、そのなかで〈寡婦〉となって長い年月を経たあとのノエミが、荒々しく鼻息をつく肥った雌馬に喩えられている。まことにF. モーリヤックは〈寡婦〉に向ける眼差しの厳しい作家である。

だがそれはもしかしたら、天使にも聖母にも擬して“母”を渴仰の対象とした幼き日の樂園と、その喪失の痛みを、残酷に罰せずにはいられないフランソワの自虐的な悲しみの投影であるのかもしれない。

前にも言ったが、母に恋し、恋されなくては、喪失の痛みも無いのである。

現実のクレールがどんな女性であったか、そんなことはじつは大した問題ではない。作家にあって重要なのは事実ではなく、ことの本質である。

この作家が“母”とのあいだに結んだ関係、それはやはり彼の実人生のなかではなく、作品のなかにも求め、探すべき事柄であろう。

母子相姦

ここにモーリヤックの作品としてはあまり世に知られていないが、研究者にとってはまことに重要な意味を持つひとつの短編小説がある。『クリスマス夜話 *Conte de Noël*』。Fayard 版全集の第四巻に、1938 年刊行の短編小説集『沈められたもの *Plongées*』にまとめて収録されている以外に単行本で発表された形跡はない。Pléiade 版の監修者ジャック・プチ Jacques Petit は、Jacques Doucet 図書館に収められた手書き原稿の綿密な校訂を経て、創作年代を 1930 年から 1936 年頃としている¹⁴⁾。この小説の登場人物であり語り手であるのが、前にもあげた 1933 年刊行の自伝的小説『フロントナック異聞』の主人公とそっくり同じ名前のイヴ・フロントナック Ive Frontenac、しかも小説は作家となったこの人物の回想の形を取っているからである。『フロントナック異聞』から零れ落ちて、独自の自立性を獲得した完成度の高い小品である。

語り手はイヴだが、小説の主人公はイヴの友達ジャン・ド・ブライユ Jean de Blaye という少年で、カトリック修道院経営の小・中・高一貫校の、中学一年頃その学校の寄宿舎で起こった出来事の記述である¹⁵⁾。ここでも、少年たちの年齢が十二歳かあるいはそれを過ぎたばかりであることに注意が必要であろう。

ジャン・ド・ブライユは由緒ある土地の名を姓に持つ旧貴族のひとり息子で、美しいブロンドの巻き毛を女の子のようにお河童にして肩まで垂らした美少年であった。それは母親が、1880 年代にフランスでも翻訳され、流行した『小公子』の主人公を模し、わが子にさせている髪型だった。だが時代は移って二十世紀間近ともなると、男子ばかりの寄宿舎にジャンのような髪型をした生徒はほかには見当たらず、「フィーユ（女の子）、フィーユ」とからかわれて苛めの対象になるだけだった。いつもはなすすべもなく苛められ

ているジャンが、ある日敢然と反撃に出た。といっても、口頭でのことであるが、それはクリスマスの前日の夕方であった。この日恒例のボルドー市内散歩をすませると、生徒たちは皆自宅へ帰って降誕祭の夜を過すのである。

あくる朝になれば暖炉の上に、幼子イエスの贈り物が子供たちの目覚めを待っている。しかしそれを準備しておくのは母親であって、サンタ・クロースでも幼子イエスでもないことを、中学に進んだ子供たちは誰でも知っている。ジャン・ド・ブライユだけが、贈り物を持ってくるのは正真正銘のイエスだ、と言い張って一步も退かなかったのである。「こいつったら信じてらあ、信じてらあ」と、中庭で大合唱が起こり、シャンパーニュといって二年落第してきた長身の悪ガキがジャンを塀にぐいぐい擦りつけながら「どうしてなんだ、言ってみろよ」と迫るのに答えて、ド・ブライユ家の御曹司は、殉教者が処刑台の前で信仰を告白するときのように、きっぱりとした口調で高らかにこう宣言した。

「ママがそう言ったんだ。ママは嘘をつかない」

「聞いたかよ、マドモワゼルのおかあちゃまは嘘がつけねえんだとさ」

シャンパーニュがあたりを睥睨しながらそう言うと、どっと追従の笑いが沸き起こった。そのなかでジャンは繰り返す。

「ママは嘘をつかない。ママがぼくを騙したことは一度もない」

それを聞くイヴ・フロントナックの胸のなかで、心臓がキュンと縮まる音がした。じつはボルドー市内散歩の道すがら、イヴとジャンはこのことを話題にしていた。そして目を輝かしながら幼子イエスの贈り物について話すジャンに、それが母親の仕業であることを知っているイヴは、友達の誤りを正すようなことは何も言わず、彼に同調して自分もまだそれを信じていると友に信じさせるかのような対応をしたのだった。

イヴにはジャンの気持がわかったからであった。イヴ自身彼に劣らぬ「マザコン」で、ママの存在は絶対であり、幸福も美も真実もママとともにあったからであった。ママに関わるものはすべて神聖な色合いを帯びていた。母

ではなく叔母のひとりが着ている服が悪趣味だと言われるのを聞いただけでパニックに陥ったこともある。だからジャン・ド・ブライユの母に対する信仰はひとごとでなく、迫害されながら「ママは嘘をつかない」と、澄んだ目をしてきっぱり宣言する友の姿は、イヴには眩しかったのである。

助けを求めるジャンの眼差しが、このときイヴのうえにとまった。

「フロントナック！」と彼は叫んだ。「きみはあれがほんとだって知ってるよね、ついさっき、散歩のとき、ふたりでそのことを話したよね」

一歩踏み出して「ド・ブライユ……」と言いかけた。そのときシャンパーニュがこっちを見た。猫のような残忍な目をして、腰を振りながらゆっくり歩いてくる。胸倉をつかんで、顔をぐっと寄せて言った。

「どうなんだい？ フロントナックの坊や」

「あれは……あれは、からかってたんだ。本気じゃなかったんだ。馬鹿にするつもりで、わざと……」

下校のベルが鳴った。ベルに救われた子供たちは外套とカバンを取りに歓声を上げながら駆け出して行った。

クリスマスのバカンスが明けたとき、イヴの教室に小公子は姿を消していた。ジャンがいた席には、髪を思い切り短く切った、以前とは似ても似つかぬ少年が座り、イヴの方へは顔を向けなかった。一度何かの拍子に目があったとき、その突き刺すような視線をイヴは受け止められなかった。

この事件には後日談がついている。

大学に進んだイヴが生まれてはじめてクリスマス前夜を家族とともにでなく、ボルドーの夜の巷で過した時のことだった。あるバーのなかで、ジャン・ド・ブライユと見まがうほどよく似た、彼の弟フィリップにイヴは出会う。そして、間違えたイヴが「あのとき、1898年のクリスマス、きみ（ジャン）は巻き毛を切らなくてもよかったんだよ」と言ったのに導かれて、その弟は兄と母との間に起こったもうひとつの事件について語るのである。

彼らの母の寝室には筆筒のうえに鍵のかかる銀の小箱が置かれていた。兄

は弟にきっと宝物がいてあるのだ、と言っていたが、母親は決して中を見せてくれず、子供たちに開けることを固く禁じていた。

母親と兄はいつも何かと言うと衝突し、口論が絶えなかった。「母はぼくよりも兄の方をよけいに愛していました」とフィリップは言った。「打ち明けたところ、母が愛していたのは兄だけだったとぼくは思うんだけど……それなのに、ぼくにはわからない何かがふたりの間を裂いてしまった……ある日、ジャンは小箱の鍵をこじあけたんです。宝物というのは、子供のころの兄の巻き毛だったんですよ。信じられますか？ まるで遺髪のようなでした。ジャンがそのとき見せた激昂ぶりの物凄さといったら……その古い髪の毛を暖炉で焼き尽くしたとき、ようやく昂奮がおさまったんです。夜になって、母が……しかし、ぼくはどうしてこんな話をあなたにするんだろう」と言っていてフィリップは杯を口に運んだ。イヴはそれを見ながら思った「この男は兄を過去のこととして語っている」。答はもう分かっているように感じながら、さりげない口調で「ジャンは死んだのですか」と聞くと、「去年、サイゴンの病院で……」と弟は答えた。「新聞に告知が出たんです。でも死亡通知は送られて来なかった。どう思います？ こんなことがあったあとで、あんな生活を送ったあげくに……」

「どんな生活を？」と問い返してもよかったのに、イヴはそうしなかった。身を持ち崩した放蕩息子の姿が目には浮かんだからだった。

その夜下宿先へ歩いて帰ったイヴは、自分自身の幼年期を思い起こすことによって「奇跡的なくらいやすやすと」ジャン・ド・ブライユの内面ドラマを再構成することができるのに驚く。そして作家としての自分に次のような分析を施すことによって、彼はこの短編小説を締めくくる。「私」というのは従ってイヴのことだが、読者がフランソワ・モーリヤックその人と読み替えることを、作者は決して拒まないであろう。

私は詩人として生まれたつもりだったが、小説家になったのは、とい

うより少なくとも小説家としての才能、能力を自覚したのはこの夜のことであった。(……) 私はこの運命の両端を握っていたのである。一方は女の子の髪型をしながら、内面に衝動的な欲望と、もっぱら母親に向けた烈しい情熱を抱えている小さな少年。そして一方はサイゴンの病院のベッドで断末魔を迎えている、ほとんどまだ子供のままの成人男性。

私は、その子にとって母親の言葉が聖なる意味を持つ学童の姿を脳裡に描いた。母が嘘もつける存在だと知ったときの彼の驚愕の眼差しを思い浮かべた。切り取られた巻き毛こそ重要だと思った。それを切ることは彼の息子としての献身に終止符を打つことだったのだ。ここで私の小説のプロローグは終わり、これからは主題の核心に踏み込んで行くことになる。敵対して立つ若い雄とその母。小箱のシーンはその中心である。ジャン・ド・ブライユは彼をこの世に生み落とした女のなかに、もはや存在しない子供をなおも生き続けさせようとする、また子供をその髪の毛のもとに、より確実に幼年期の囚人として保ちつけようとする、偏執的な執着心を見出し、憎んでいたのである。息子のなかにちょっとでも次のものが芽生えはじめるや否や、たちまち争いは悲劇の様相を呈したにちがいない。最初の友情、最初の恋、帰宅しない最初の夜、金の無心、母にはあかせない会合、最初の警察沙汰……

私はドアの前に立っていた。朝日をうけてバルコニーのあたりが白みはじめた。鐘の音が暁のミサを告げる。眠気に抗して私は机に向かった。燕尾服を着て胸のボタン穴には花を挿したまま、ペンを取り、白い頁を開いた。それほどいま私を訪れた思念を忘れ去るのが怖かったのだ！
ひとりの小説家が誕生して、この悲しい世界に向かって目を開きはじめていた¹⁶⁾。

「母と子」の主題が、その落ち込んだ深淵を含め、作家フランソワ・モリーヤックにとっていかに重要かつ本質的なものであるかを、これ以上率直に、

そして見事に説明したものは他にあるまい。銀の小箱に秘められた金色の巻き毛から匂い立つエロティスムは母子相姦に通じる暗い情念を告知する。これぞまさにこの作家の独壇場である。“母”の影のもとに誕生したモーリヤック世界……その“影”の源にある闇の深さを、そこに光をあてずにいられない小説家としての業までも含めて、この小品は見事に言語化していると言えないであろうか。

母でない“母”たち

Malcolm Scott は前掲書『モーリヤックとジイド』のなかで、この“母”の影が、母ではない、母の代替物となる成熟した女性の性的魅力となって男性を蔽う例をあげている。まず『蝮のからみあい』のなかで、妻となるイザよりも先にイザの母親の美貌に気づき、裸のうなじや腕、手に心を乱される主人公のルイ Louis。『夜の終り *La Fin de la nuit*』(1935) のテレーズに心奪われるジョルジュ・フィロール Georges Filhol。『運命 *Destins*』(1928) の青年たちに影響を及ぼすエリザベート・ゴルナック Élisabeth Gornac。そして注目すべき作品『黒い天使たち *Les Anges noirs*』(1936)。

このなかで、主人公ガブリエル・グラデール Gabriel Gradère は、モーリヤックの作品にはほかに類を見ない、殺人シーンを演じる。彼に殺されるかつての恋人アリーヌ Aline は「息子のように」彼の面倒を見た過去を彼に思い出させようとしていることからわかるように、これは一種の「母殺し」である、とスコット氏は指摘する。そしてモーリヤックにしては珍しい暴力的殺人行為の生々しい叙述のあと、これが一種の「強姦」であり、グラデールが行為のあと襲われた「ほとんど性的な疲労脱力感」に注目している。

スコット氏によれば、モーリヤックが発売後間もなく回収してしまったため人の目に触れることの少なかった『悪 *Le Mal*』(1924) には、二人の身代わりファニー Fanny とコロンプ Colomme (手書き草稿ではクレールと

いう名が与えられていた)のエロティックな描写によって、主人公ファビアン Fabian の「母と交わりたいという夢」がかなり明確に看取れるという。

このように見て行くなれば、ほかにもどれほど多くの男女がモーリヤック世界のなかで〈母と子〉を演じていることであろうか。『悪』ひとつ取っても、この作品が〈母と子〉をテーマとしていることは明らかなことで、他にもこの小説が内包している種々の問題性については、私自身関心を払わずにはいられないものがある。姿を変えた〈母たち〉の問題についてはまたいずれ、私自身の見方から、稿をあらためて論じてみたいと考えている。

「F. モーリヤックにおける“母”の影」に関しては、まだまだ考察のとば口に差しかかったに過ぎないが、予定の枚数も尽きたことであるし、今回はひとまずこれをもって筆を擱きたい。

《注》

- 1) 《*Vie de Jésus*》in Œuvres Complètes de François Mauriac, Paris, Fayard, 1950-1956 Tome VII pp. 19-20
- 2) Suzanne Prou : 《Mauriac et la jeune fille》Paris, Edition Ramsay 1982
- 3) 《*Un adolescent d'autrefois*》in Œuvres romanesques et théâtrales complètes, Bibl. de la Pléiade (略号 ORTC) IV p. 742
- 4) “ ” p. 742
- 5) ORTC III p. 613
- 6) ORTC III p. 615
- 7) ORTC III p. 637
- 8) Malcolm Scott : 《Mauriac et Gide—La recherche du Moi》Bordeaux L'Esprit du Temps 2004
- 9) 《Mauriac et Gide》p. 201
- 10) この項におけるクレールの伝記的記述は、主として下記に拠る：
Jean Lacouture : 《François Mauriac》Paris, 1980 Editions du Seuil
- 11) François Mauriac : 《*Mémoires intérieurs, Nouveaux Mémoires intérieurs*》Paris, Flammarion, 1985 p. 381
- 12) ORTC II pp. 555-557
- 13) 《*Le dernier chapitre du Baiser au Lépreux*》édition établie par J. Petit in ORTC II pp. 534-544

- 14) 《*Conte de Noël*》 édition établie par J. Petit in ORTC II
- 15) " pp. 394-403
- 16) " p. 403
- 17) 《Mauriac et Gide》 pp. 203-205

(なかじま・こうこ 元農学部教授)